
とある赤き翼の奮闘記録

ノッポガキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある赤き翼の奮闘記録

【Nコード】

N9181X

【作者名】

ノッポガキ

【あらすじ】

とある白き翼の奮闘記録のIFストーリー。

もしも、上条&御坂が魔法世界の大戦期に飛ばされていたら。

さあ、上条。その右手で幻想をぶち殺せ！！

目指すは真のハッピーエンドだ！！！！

ぶっちゃけ、上条なら何とかしてくれるかと思って始めました。

あと、コレが完結したら、たぶん平和な麻帆良学園のシリアスなしの平和な日常話をこの世界観でやる予定なんだ。これはそのための

下準備だつたりするんだ。予想より早く完結するんだよ諸君。

そう、過度な期待はしないでください。

今回も上琴なんで認められない人はスルー推奨。

さらに、ご都合主義が嫌な人も見ないほうがいい。

アンチ、というより敵がたくさん改心する可能性があるよ。幻想をぶち壊されて。

EP・i プロローグは大事だよね。使いまわしだけど（前書き）

ほとんど、とある白き翼のプロローグのコピーですので、見なくてもいいかもしれません。

割と早く完結する予定の作品です。

EP・1 プロローグは大事だよ。使いまわしだけど

第三次世界大戦、科学と魔術の戦い。

とある少年——上条当麻はローマ正教、神の右席のリーダーである右方のフィアンマを打ち倒していた。だが、その数分前、あるイレギュラーが起こっていた。

「やっと……たどり着けた」

常盤台のEース、御坂美琴がベツヘレムの星にたどり着いていたのだ。

ここまでいっしょに来ていたミサカ10777号だが、VTOL戦闘機が損傷したため、やむ終えず着陸している。このとき、彼女に地上へ戻るすべはなかった。

「さてと、あのバカはどこにいるかしら」

美琴は上条を捜しに来たのだが、ベツヘレムの星は広く、なかなか見つからない。

「うーん、もしかしたら外側にいるのかもしれないわね」

この少女は結構鋭い勘を持っていたりする。

「でも、どうやって上に行けばいいのか……ん？」

そのとき、美琴はある物体を見つけた。
円筒の形をし、側面には記号がかいてある物体——禁書目録の
制御霊装を。

「？ なにかしら……え！？」

制御霊装は突然光りだし、空中にさかさまに浮いた少女——インデックスを投影した。

『え！？ 短髪！！？ なんでここにいるの！！！！？？？？』

「それはこっちのセリフよ！？ ていうかなんで逆さまなの！？」

少女達はしばらく言い合いをしていたが、不毛だと気がついたのか、美琴は話題を変える。

「で、シスターは何でそんなことになっているの？」

『え、えと……それは』

「言いたくないなら別にいいわよ、無理やり関わるけどね」

インデックスは、美琴の瞳にどこかで感じた色を見た気がした。

『……短髪、もし誰かが地獄のそこまでついてきてくれるって言うたらどうする？』

「そんなこと聞いてどうするの？」

『答えてくれる？』

インデックスはある少年の前で見せた笑顔と同じ笑顔をした。あの、悲しい笑顔を。

「そんなの決まっているじゃない。地獄の底から引っ張りあげるだ

けよ」

何の迷いもなく、彼女は答えた。あの少年と同じように。

『……（あの人と、同じだね）……短髪……話を聞いてくれる？』

「はじめからそういつているでしょ。あと私の名前は御坂美琴よ」

『わかったよみこと、それじゃあ私のことも名前で呼んでね』

「分かったわ、インデックス」

インデックスは語り始めた。上条当麻との出会い、自分のために戦ってくれたこと、魔術師のこと、ローマ正教を相手に色々な人たちを助けるために戦ってくれたこと。そして、自分を助けるために、自分と戦ったことを。自分が、巻き込んでしまったことを。

美琴は、何の冗談かとも思ったが、今この状況、大天使、ここに来るまでにあった色々な出来事が魔術の存在を肯定していることに気がついた。そして、インデックスの話し方に違和感があったことにも。

「……インデックス、あんたはあの事を知っているの？」

『……私は………うん、知っているんだよ』

「………インデックス、私はあなたが気に病む必要は無いと思うわ」

『どうして！？ みことはそういいきれの！！！？』

「アイツは、上条当麻はあなたに謝ってもらうためにあなたを助けたの？」

『！？』

御坂美琴は前に上条当麻本人から、記憶を失っても戦い続ける理由を聞いたことがある。そして、その時に気がついた感情を胸にここ

まで来たのだ。彼女も、間違ったことを言っただと思っている。だが、彼は謝ってもらったために戦っているわけでもないことも理解している。

「アイツのことだからあなたに謝るでしょうね。で、あなたは どうするの？」

『……そんなの決まってるんだよ』

「そう……ならいいわ」

『みこと……当麻のことをたのむんだよ。私は学園都市に帰らないつもりだから』

「それはあなたが自分の口で言うべきことよインデックス。ちょうど誰かさんもきたみたいだしね」

美琴のいったとおり、美琴の後方から上条当麻がやってきた。

「み、御坂！？ 何でここにいるんだよ！！！？？」

「アンタを助けに来たに決まってるでしょ！？」

すぐに言い合いをはじめそうになる二人、だが、美琴はそんなことをしている場合ではないと思いつく。

「アンタ、あの子に言うことがあるんでしょ、私は向こうに行つてあげるから早く済ませなさい」

「お、おい！」

「アンタが自分の意思でここに来たように、私も自分の意思でここにいるのよ、言うておくけど、私は何を言われたってアンタを置いて帰るつもりは無いから」

そう言うと、美琴は少し離れた位置に行く。

『とうま、みことを責めないであげて欲しいかも。みことはとうま』

と同じように誰かを助けるためにここまで来たんだから』

「……そうだな、それに俺にそんなことを言う資格なんてないよな………インデックス、俺の話を聞いてくれるか？」

『分かったよ、とうま』

「お前にひどい事してきた、俺がお前に隠し続けていたことを、自分の口で、今から話す。無事に帰れないからこそ、今」

上条は話し始めた。とても怖かった、だが、勇気を持って話し始めた。

「俺は」

「

」

長い言葉を。

『もういいんだよとうま。自分ひとりで背負い込まなくて』

「でも、俺は！」

『とうま、私は学園都市にはもどらないんだよ』

「え？」

『わたしはとうまをもう巻き込むわけにはいかないんだよ』

「………だけど、お前はどうなるんだ？」

『………とうまが私に謝りたかったみたいに、私にも謝りたい人たちがいる。私が守りたい人たちもいる………とうま、これから先は私が自分の力でやりたいんだよ、誰かに守ってもらうんじゃない、自分の手で誰かを守れるようになりたいんだよ』

インデックスは決意した、きつと今も自分を守っている人達がいる。

学園都市の天使や、炎の魔術師、極東の聖人。そして、自分が今まで接してきた大切な友人達、家族と呼べる人々、小さな先生、吸血殺し、少年の両親。そんな人たちを守るくらいに強くなりたいと少女は願う。

「だけど、俺はお前に直接謝りたい」

『……そんなのいいよ。だけどとうま、まだ謝り足りないなら一つだけ約束して欲しいんだよ』

「なんだ？」

『とうま、みことを……絶対に守ってあげて』

上条は思い出す、アステカの魔術師との約束を。

「お前に言われるまでもねえよ、俺は約束してんだ、御坂美琴とその周りの世界を守るって」

『……やっぱり、とうまはとうまなんだね』

「どういう意味だよ!？」

『……はあ………』

「なんだよその諦めたようなため息は」

『なんでもないんだよ……でもとうま、ちゃんと約束してみことを守ってあげるって』

「ああ、約束する」

上条はインデックスに通信装置の周波数を教えると、制御霊装を破壊するために近くに寄った。

「じゃあ、元気でな」

『とうまも元気でね』

そして、上条の右手が……触れた。

何かが割れるような音が響いたのと同時に、インデックスは自分の体に戻った。

「終わったみたいね」

「ああ……これから最後の戦いがはじまる、逃げるならいまのうちだぞ」

「覚悟は出来ているわよ、どうせアンタは最後まで戦うんでしょ。だったら私も最後まで付き合っわよ」

美琴は真っ直ぐに上条を見据える。その目に迷いは無かった。

「はあ、何言っても無駄みたいですね」

「当たり前でしょ、じゃなかったらここまで来ないわよ」

「後悔するなよ」

「そっちこそ」

二人はステイルの指示で上昇用霊装を破壊して回っている。被害を最小限で食い止めるために。

上条の右手で破壊し美琴の能力でモノレールの制御を確実に行う。より迅速に。

九番霊装へ向かう途中、スピーカーから焦りのこもった声が聞こえた。

『なぜ、ミーシャ・クロイツェフが……!?』

大天使『神の力』正確な名前はガブリエル。信者でなくとも知っているであろう有名な天使である。

女性の姿をした天使は莫大な氷を求めて極点に向かってく。

「クソッ……（どうする、美琴がいる以上下手な動きは）」

「何を迷っている暇があるの……」

「アイツを止めるわよ」

「！？……ああ、そうだな」

この少女はすでに覚悟が出来ていた……なのに自分は何を迷っていたのだ。約束したではないか。彼女を御坂美琴を必ず守ると。

「いくぞ御坂！」

ベツヘレムの星を確実にガブリエルの真上に持つてくために、美琴が演算をする。そして、上条が美琴の指示で霊装を破壊していく。

そして、ついにガブリエルの真上にベツヘレムの星は到着した。

上条（記憶をなくしてから色々なことがあった。まだ、半年も経っていないけど本当にいろんなことが。ほとんどは魔術がらみだったど……そっいゃ、御坂の時だけは魔術がらみじゃなかったな）

上条の頭の中に色々な人々の顔が浮かぶ。友達、家族、先生、今まで戦った人間、助けられなかった人、純白のシスター、そして、自分の傍らにいる少女。

「……ん……こっは？」

「……あ、あれ……どうなったんだっけ？」

「お、御坂。無事か？」

「アンタこそ大丈夫なの？」

「オレは平気だけど……そういえば、ここはどこだ？」

「天国とか？」

「御坂、洒落になってないぞ」

上条が、空を見上げて見ると、現実にはいないはずのある生き物がいた。

「は？」

「どうかしたの？」

「い、いや……御坂……あれ」

「あれって……は？」

空には、ドラゴンがいた。

「は？」

く
赤き翼
く

ドゴオオオオオオン!!!!!!

「派手にやってるなあいつら」
「そうですね、詠春」

上条たちが驚いている頃。
ナギ・スプリングフィールドとジャック・ラカン
は初戦闘中だった。

く上条&御坂く

「どこどこだココはー?!?!?!?!?!」

EP・i プロローグは大事だよ。使いまわしだけど（後書き）

うん、ほとんど同じ。

時期としてはジャック・ラカンとの初戦闘って書いてあるよね。
ナギが14くらいの頃だよ。

かなりご都合主義の作品になるけど、ソレが許せる人だけにしてくれ。

EP・2 うん、ココどこ？ そして遭遇&旅は道連れ世は情け？（前書き）

この作品はハイテンションで仕上げています。

さあ、活目してみよ！！

今回出ているドラゴンは鷹竜の鷹じゃない版みたいな感じです。

あんまり深く考えなくてもいいけどね。

EP・2 うん、コトどい？ そして遭遇&旅は道連れ世は情け？

（上条）

『ギャオオオオオオ！！！！』

「「ど、ドラゴン！？」」

な、なんでドラゴンなんだああああああ！！！！！！？？？？

「ちょ、なんであんなのがここにいるのよ！？」

「知るか！！ 上条さんだって、ビックリしているんだよ！！！」

そして、ドラゴンは火を噴いた。

「って、うおおおおおおおおお！？」

パキューン！

「お、右手は効くって事は……なんかの異能力か？」
『グル！？』

「喰らえ！！！」

御坂は電撃を浴びせる。だが、ドラゴンにはあまり効いていないようだ。

「って、ぜんぜん効いていない!?!」

『グル?』

「うおおおおお!」

「って、なんで素手で殴ろうとしているのよ!?!?!?!」

いや、テンパってしまいました……『グギャアアアアア!?!』

……あれ、効いてる?

『グルルル!?!』

「なんでアンタのパンチは効いてるのよ」

「もしかして……なんかの異能の力で身を守っているのか……で、本体はすごい弱いとか」

とりあえず、懷に飛び込んで右手で触る。

「ちょ、アンタ!?!」

「御坂、電撃を撃て!?!」

「え、でも!?!」

「早く!?!?!」

御坂は何度かためらったが、電撃をうつてきた。そして、

『ガアアアア！？』

ドラゴンは気絶した。

オレは右手でドラゴンを触っていたから感電しなかった。

「……………」

「み、御坂さん」

「……………」

「あのー……………姫、何をそんなに不機嫌に」

「グスッ……………心配したんだから……………」

「う……………俺が悪かったよ……………」

オレが、御坂に謝っていたそのとき、遠くから声が聞こえてきた。

『……………』
『……………』

何人かの男達がいて、バカ騒ぎしていたが、内容は良く分からなか

った。

「どこの国の人だ？」

「さあ……あ、一人日本人っぽい人がいるから言葉通じるかもよ」

そこで、オレ達は日本人と思われる男の人に話しかけた。

「あのーすいません。ココはどこでしょうか？」

「ん、どこって……魔法世界の……どうしたんだそんな顔して？」

「あのー効き間違いじゃなければ魔法世界って聞こえたんですが…

……」

「だからそう言っているが」

「……魔法世界！?!?!?」

オレ達が話しかけた人は青山詠春。赤き翼という団体の一員らしい。

オレ達は自分達の事情とか、ココはどこなのかとか色々話していた。

「……なんとも信じられん話だが……アル、どう思う？」

「少なくともウソを言っているようには感じられませんよ。半生の書でも確認しましたし」

「いつの間に……」

「フフフ（上条という男の半生が一年にも満たないのは気になりますかね）」

「へー、幻想殺しかー」

「気も無効化……いや、相殺しちまうみてえだな」

最初に喋った赤毛の奴はナギ・スプリングフィールド。赤き翼のリーダーらしい。

次の大男はジャック・ラカン。

「おもしれえ、勝負だ!!」

「え、上条さんは不思議な右手があるだけでそれ以外は普通の高校生ですことよ!？」

この右手のせいで翻訳魔法とかいうものをかけ辛かったぐらいだ。なんとか、右手で触っても影響が出ないように頭の中でとどめてもらった。

そういえば、魔法って……人間以外でも使えるらしいから魔術とは違うのだろうか？

たしか、魔術は才能ない人間のためのものらしいし。

「ごちやごちやいってねえで喰らえ!」

ナギの手から……てええええええええええ！？

パキューン！

「あ、アブねー」

「お、本当に消しやがった」

「あんだ……当麻に何するのよ!!!」

ビリビリビリ!!

「ギャアアア!？」

「あの女の子電撃出さなかったか？ 魔力も気もなしで」

「彼らの言う、超能力という奴でしょう。実に興味深いですね」
「そうじゃのう」

ちなみに、最後に喋っていた少年はゼクトというらしい。

そのあと、行く当てもないので赤き翼に同行することになった。
修行をつけてもらいながら。

……第3次世界大戦を生き抜いたら今度は魔法世界の大戦って……
不幸だ

EP・2 うん、ココどこ？ そして遭遇&旅は道連れ世は情け？（後書き）

とりあえず、サクサク進むんだ。

上琴をやりながらちよいしリアスに。

そして、目指すは最高のハッピーエンドだ。

EP・3 レッツ魔改造!! 修行の日々 そして、グレートブリッジ奪還作戦

いろいろ飛ばしていくぜ!!

色々だね。

ちなみにこの作品は色々クロスする予定。

連載終了後のこの続編だけになるかもだけど。

独自解釈ありだよ。

（上条）

「どうやら、ジャックは赤き翼の仲間じゃないらしい……じゃなかったらしい。」

「ナギ！ 今日こそ決着をつけるぞ！！」

「おうよー！！！」

「なんであいつ等はいつも喧嘩してるんでせうか？」

「よく言うたろ、喧嘩するほど仲がいいって」

「……まあ、たしかに」

「ちなみに、オレは今詠春さんに気の使い方を教えてもらってる。」

「すでに、無自覚に発動していることがあるらしい（イギリスでキャーリサを殴ったとき怪我しなかったのは気を使っていたからだと思う）。」

「御坂はゼクトから魔法を教わっていた。魔術と違って超能力者でも使えるみたいだ。」

「すでに雷の魔法はナギをこえてるのう」

「え、そうなの？」

「ナギはものすごい雷系の魔法を使っていたけど……アレを超えるの」

か……

「ほかはからつきしじゃがな」

「うっ………」

涙目で落ち込んでいるな……

「当麻君、じゃあ次は………」

そんな風に、修行の日々は続いた。

「上条君たちは戦争は見たことがあるのかい？」

ある日、詠春さんがそんなことを聞いてきた。

「まあ、俺達のいた世界じゃ第3次世界大戦の真っ只中でしたから」

「世界大戦か……きつと泥沼のように続いたんだろ。つらかっただらうね」

「……あのーそれが一週間くらいで終わっただと思いますよ」

「は？」

「ぶっちゃけ、俺が首謀者殴っちゃったんで………」

（本当に君はただの高校生だったのか！？）

く御坂く

「ふむ……雷系の精霊にはとことん好かれているようじゃの」

「それってやっぱり……」

「うむ、その超能力というやつのおかげじゃろうな」

やっぱり私が電撃使いだからか……

「逆に水系や土系には向いておらんの」

正直、魔法ってどうなのよって思ったんだけど……当麻はすんなりと受け入れているし……まあ、私も天使は見たけどいまだに信じられないわね。

ただ、向こうで非常識な戦いを繰り広げている二人がいるんだけど

……

「ゼクトさん、あれ止めなくていいんですか？」

ゼクトさんは見たため異常の年上らしいのでさん付けで呼んでいます。

「いつものことじゃ」

「確かにそうですけど……」

ナギとジャックが戦つと地形が変わるんですけど……止めなくていいんですか？

「はあー、呪文とか面倒なのよね……なんかこう、詠唱とかいうのをサポートするような道具があれば……あ、なんかひらめいたかも」

その後、一週間ほど美琴は何かを作っていた。

（上条）

「ところで、上条君は御坂さんとはどのような関係なのですか？」

突然、アルがそんなことを聞いて来た。

「どのような関係って……そういえば、どんな関係なんだ？」

友達？ 腐れ縁？ 知り合い……そういえばそうなんだがなんか違うような……

「うーん、分かん」

「……君、鈍感って言われませんか？」

「は？」

「はあー、重症のようですね」

「まさか、アルビレオにそこまで言わせるとは」

「ナギ以上に鈍感でしょうね彼は」

「なんの話でせうか？」

「君には一生分からないと思いますよ」「」

「二人してひどいっすよ」

「なあ、お師匠。御坂を鍛えていたんじゃないのか？」

「そうなんじゃが……」

「ん、御坂がどうかしたのか？」

「お、当麻。どうだ修行のほうは」

「えっと……まあぼちぼち。ソレより御坂は？」

「うむ、何かをひらめいたとか言つての、よくわからんもの作って
いたぞ」

「よくわからんもの？」

「出来たー！！」

「ん、御坂……その手に持っているのはなんだ？」

「ふふふ……対に出来たわ……名前はまだ決めてないけど……魔法
を使うのをサポートしてくれる機械よ！！」

「………」

「見てなさい……『セットアップ』！！」

御坂が何かを叫んだ瞬間。御坂の服が変わっていて、手に持っていた箱みたいなものが、杖に変わっていた。

「……えっと、なんてコメントすればいいのか……昔の魔法少女？

お前ってそういう子供っぽい趣味だったなそういえば」

「な／＼／＼／＼／＼　そ、ソレは今関係ないでしょ……！！」

いや、でもなー

「まあ、見てなさい。『収縮砲　バージョン　1』」

御坂が何かを唱えた。すると、杖の先に魔法陣が3つぐらい出ており、何かを溜めていた。

「発射!!」

杖の先から極太の光線が噴き出した……って、なんじゃそりゃ!?

「はっはっは……やりすぎたわね」

後で聞くと、アルが持っていた古代の魔法の文献を基に作った、魔法詠唱をサポートするアイテムらしい。

そういえば、レベル5って頭いいんだっとな……

ちなみに、このときミサカが作ったアイテムは後に、『デバイス』と呼ばれることとなる。

「なあ、上条君」

「詠春さん、どうかしましたか?」

「君は、誰かを殺したことはあるのかい?」

「……ないですよ」

「君の事を見ていて思ったんだが……君の性格上。誰かが困っていたら助けるために戦ったはずだ。それで敵と戦った時、君はその敵を殺す気で戦っているのかい?」

「なんですか？」

「いや、なんでって……」

「オレは誰かが目の前で困っていたから助けただけで、敵とかそんなのは考えていませんよ。誰かを助ける途中で、間違ってると思ったことをしている奴がいたから止めただけです。それに、人が常に間違え続けるわけではないと思いますから」

「！？……そうか」

「？　なんでそんなことを聞いてきたんですか？」

「いや、なんでもない……忘れてくれ」

〈詠春〉

「詠春。どうかしましたか？」

「なあ、アルビレオ……彼らは眩しすぎるな」

「……そうですね。戦争のなかを戦ってきたとは思えないくらいに。特に、上条君は敵でさえも助けようとするようですからね」

「ああ………もしかしたら、彼らのような心を持つものの事を英雄というのかもしれないな」

〈上条〉

「あー、ほんとにやるんすか？」

「おうよー!!」

なぜか、ジャックと戦うことになりました。

いや、『オレが直々にどのくらい強くなったか見てやるぜ!!--!!』

って言われて。

いやいやいやいや!! 無理だろ絶対!!!! アンタバグキャラだろ!!!!

「さあ、行くぜ!!!」

「え、ちよつと待って!？」

「羅漢適当に右パンチ!!」

死ぬー!？

パキューン!

「し、死ぬかと思った……」

「フム、この程度の気はすぐに相殺されるのか……さあ、突っ立てないでかかって来い!!」

「はぁ……なるようになれだ」

オレは詠春さんに教えてもらった瞬動で一気に懐にもぐりこむ。

「お!？」

「ハアツ!!」

「ぐっ!？」

あ、あれ？ 効いてる？

「ぐう…… 防御無視とか…… お前の右手も十分チートだぞ」

「え……でも自分の気は消してないんでせうが？」
「自分自身に纏っている身体強化の気は消せないんだろうよ。魂とかと同じで」

そういえば、ジャックは戦闘に関しては頭いいんだよな。

「よし、本気で行くぜ！！！」
「え、ちよつと待って！！！！？？」

死ぬかと思った。

「純粋な筋力でしかガードできないって……お前、魔法使いの天敵だぞ」

「ぜえ……ぜえ、その筋力でガードしきるジャックのセリフじゃねえよ……」

そして、ついにやってきた戦い。

今まで、大きな戦いが起こるとオレ達は食料調達とかに行っていたんだが、

「はあ！？ オレ達も戦いに参加しろあ！？」
「な、なんで私達が」

「はつきり言いましょう。あなた達かなり強くなってますよ」

「いや、だからって」

「うん、問答無用」

「不幸だー!?」「」

詠春さん曰く。

『この世界は血なまぐさいことが多い。はつきり見ておいたほうが
いいだろう』

らしい。

正直、御坂は連れて行きたくないんだが……

「おいていくとか言つつもりじゃないわよね?」

言つつもりでしたスイマセン。だからその杖をこっちに向けるな!
!!

そして始まったのがグレートブリッジ奪還作戦。

うわー、第3次世界大戦が可愛く見えるほどの光景だな。

なんだよあの巨人は!?

とりあえず、オレは向こうから飛んできた魔力弾を右手で消しまくっていた。

ちなみに、虚空瞬動は覚えている。

御坂は……どうやっているのか知らないが、背中から雷の翼を生やして飛んでいた。

能力の応用らしい。条件がいいときしか使えなかったらしいのだが、魔力と併用するとか何とかでいつでも使えるようになったとか。正直、上条さんには分かりません。

で、その御坂は。

「喰らえ——『レールガン』!!!!!!」

あの杖を完成させており、杖の先から圧縮された魔力砲が放たれていた。

正直、向こうの艦隊は全滅したんじゃないかと思ったが、非殺傷設定（痛みはあるけどダメージの無い攻撃）らしい。

そっちのほうが一えげつなくないか？

この戦いで赤き翼は有名になった。

その後、色んなところで戦っていくうちに

オレは魔法が効かなかったり、倒した敵を説教して改心させたりしていることから、

「幻想殺し」「イマジンプレイカー」「連合の説教男」「フラグメイカー」「つーか魔法が効かないんだけどマジで」

当の異名をとる事となっていました。

「またフラグたてたんかあああああ!!!!!!」

「み、御坂さん!!! その電撃をしまってくださいiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!」

ちなみに、御坂は、

「電撃姫」「レールガン」「非殺傷の女王」「痛みの女神」「なんで怪我してねえのにこんなにいてえんだよ」
などの異名をとってしまった。

その後、ガトウという人と、タカミチという子供が仲間になった。

「なかなか筋があるな」

「は、はあ……」

ちなみに、今オレはガトウさんから感卦法を教わっている。

右手に気（幻想殺しは自身の気は消さないようだ……生命エネルギーから作られたものだからか？）を左手に魔力を集める……そして、合成するのだが……無になるとかなんとか……正直、良く分からん……何も考えないで混ぜればいいのか？

「……お、出来た」

「は、早すぎだろ!？」

ガトウさんは腰を抜かしていた。

く御坂く

「うーん、ちょっと作りすぎたわね……」

何をつて……デバイスをね……100個ぐらい作ったのよ。当麻があまりかまってくれなくて暇だったから。

「あのー、これどうするんですか？」

「そうねー、アリアドネーにでも売ろっか」

興味深いとか色々言われてものすごい高値で売れました。

後に、コレが魔王と呼ばれる少女を生み出す原因になるとは彼女は
まだ知らなかった。

く上条く

「当麻！！俺と勝負だ！！」

なぜか、ナギと勝負することになりました。はい。

「なんでだよ！！！」

「まともにお前と戦ったこと無いからな」

「ソレだけが理由か！！！」

「問答無用！！」

ナギは6人くらいに分身してきやがった。

「なんで影分身が使えるんだよ！！！」

「とりあえず、喰らえ！！！」

「チイツ！！」

オレはすぐさま感卦法を使い、身体能力を上げる。

「はあっ！！！！」

あ、分身が全部消し飛んだ……なんつーか、俺も人外になってきたなあ……あ、右腕が生えてきた時点で人外か。

不幸だ。

「行くぜ——『千の雷』!!!!!!」

「ぐっ!?!」

オレはとっさに右腕を突き出し、攻撃を絶える。

「ぐううう!?!」

け、消しきれない!?!　ぐ、うおおおおおおおおお!!
!!!!!!

そのまま力をこめ続けると、右腕からドラゴンの顎が飛び出た。

『ガアアアアアアア!!!!!』

「な、なんだソレ!?!」

『ガアアアアアアア!!!!!』

「つて……なんだか力が抜ける………」

「む、気を溜められない……つて、なんだ上条のあの腕は!?!」

「どうやら、アレのせいみたいじゃの」

「あたりの、気や魔力を相殺してますね」

「あんな力を隠し持っていたのか……」

「というより、たった今覚醒したんではないですか？」

『ガオオ、お、お……』

「ぐっ……」

ドサッ

そのあと、オレは2日ほど気絶していた。

ガトウさんや、アルによると、

感卦の気に触発されて、中に眠っていた何かの力が出てきたんじゃないかってことらしい。

そして、俺が眠っている間にウエスペルタティア王国、アリカ王女に協力することになったらしい。

それまでの事のあらましを御坂に聞こうとしたんだが、

「アンタは……この二日間私がどれだけ心配したと思ってたのよお
おお……」

EP・3 レッツ魔改造！！ 修行の日々 そして、グレートブリッジ奪還作戦

色んなネタをやってるけど、後悔はしていない。

むしろ、続編で何が起こるのか感のいい人はわかると思う。

あと、ぶっちゃけ上条さんは肉体強化以外の魔法はほとんど使えません。

次回は上巻回だよ。

EP・4 とりあえず話し合ってみるのもいいと思う 戦いも近いし姫様も助は

戦いも近いし姫様も助は

結構ノリで進めているこの小説。

予想以上に早く終わると思います。

続編には結構早く進めるかな。

続はあるゲームの主人公の子孫という感じの設定のオリキャラが主人公の予定です。

ヒロインは前回、ある作品のアイテムがでしたが、そのキャラでいこうと思っています。

といっても、回ごとに、主人公が変わる予定ですが。

メインは先ほどのベたキャラというだけ。

そして、今回は上琴回じゃあああああああああ！！！！！！！！！！

!!!!!!

EP・4 とりあえず話し合ってみるのもいいと思う 戦いも近いし姫様も助は

（上条）

『コスモ エンテレケイア
完全なる世界』

これが、赤き翼が掴んだ組織の名前。

戦争をしている国、ほぼ全ての中に奴らがいる。

そして、戦争を起こすために裏で手を引いている連中のことだ。

オレ達は休暇中に内偵をすることになった……ハズなんだが……

「あのー御坂さん？　なんで上条さんは貴女様の買い物に付き合わなければならぬのでしょうか？」

「なんか言った？」

「い、いえ何も」

だからその電撃をしまってください。

とりあえず、少し休憩がてら休めそうな場所に来た。時間の関係か、人通りは無かった。

「そもそもアンタは調査とか向いているような奴だっけ？」

さっきの話を蒸し返してきやがった。

「う、確かにそうだけだよ」

「だったら、たまには休んでもいいじゃない」

たまには休むか……本当だったら御坂はこんなところにいるべきじゃないよな……

「……………」

「ん、どうかした？」

オレは、御坂美琴と、その周りの世界を守るって約束したのに……
こんなところに御坂を連れてきちゃった……

「なあ、御坂」

「ん、なに？」

「……………」お前はどこか安全なところに行ってもいいんだぞ」

「……………」え？」

「御坂」

いま、コイツはなんて言った？

「なあ、みさ、か？」

「……じゃないわよ」

「え？」

「ふざけんじゃないわよ！！！！」

「！？」

「私じゃ足手まといっって言いたいの！？」

「そうはいつてねえだろ！！」

「じゃあ、何なのよ！！」

「本当だつたらお前は这个世界に来るべきじゃなかった！　オレがお前を巻き込んだじまつたんだよ！」

「そんなこと無い！　私が自分でついてきたのよ！！　……後悔はしていないわ」

「それでも、俺のせいで……」

パァン！！

（上条）

何か、叩かれる音が響いた。

「……ッ」

目の前には、涙を浮かべて腕を振り切っていた御坂がいた。

「アンタのせいじゃない。私が……私がアンタと一緒にいたいからついてきたの……だから自分のせいにしないでよ」

「……」
「……」

「……さっきは本当にごめんな。なんか、後ろ向きになっていた」
「いいわよ、別に」
「なあ、そっぴいえはなんで俺についてきたんだ？」
「ガクッ……」（アレだけ言っても気がつかないのかコイツは）
「どうかしたのか？」

「……」（ああもう！！ 直接言わなきゃ伝わりそうもないわよね……）

「そ、その……返事は？」

「え、えとその！？」

いや、こういうときなんいえばいいんだ！？

正直、いままで御坂のことをそういう風に見ていなかったし……

「……御坂、今はまだちゃんとした答えを出せそうに無いからさ、全部片付いたそのときって事にしてくれないか？」

ただ逃げているだけなのかもしれない。でも、

「オレはまだ、お前を守る力は無いからさ。だから、もう少し待ってくれないか？」

「……………分かったわ。でも、その代わりに、これからは名前で呼んでね、当麻」

「いや、その……………」

「だめなの？ 当麻」

「分かったよ……………み、美琴」

「……………」

いざ、意識しだすと恥ずかしい……

次の日のことだ。

「おいおいおいおい！ 痛い昨日何があっただなあ！」

俺はジャックにいじられています。美琴はいつの間にか逃げてるし。

「嬢ちゃんはいつもいじっていたからなあ、逃げられちゃったか」

いつも！？ てことは全員気がついていたのか！？

「ナギ以外は全員気がついていたぞ」

マジかよ……

「お前って本当に鈍感だな」

「か、返す言葉もございません」

「で、どこまでやったんだ？」

「いや、その……別に付き合ってるわけじゃ」

「ヘタレめ」

「グハッ！」

とりあえず、ジャックはこの手の話題（恋バナ）に鋭いことが分かった。

この日の夜、ナギたちが『完全なる世界』の罠にかかり、赤き翼は
反逆者として指名手配されてしまった。

そして、オレ達はアリカ姫を救出しに向かった。

「オラアアアアアアア！！！！！」

ナギの『千の雷』だけで十分な気がするけど、

「ハアアアアア！！！」

美琴が杖からビーム見たいのを出したり、

「雷光剣！！！！！！」

詠春さんが薙ぎ倒したり、

「オラアアアア！！！！！」

ジャックが殴り飛ばしたり、

いや、オーバーキルだろコレ。

しかも、美琴がナギたちも非殺傷に出来るように、腕輪型のアイテム作っていたから、実害は武装解除レベル。痛みはマジっていうえぐいものが出来ちゃったし。

「うーん、デバイスの理論を応用して進化する人工知能を搭載したパワードスーツとか作れるかな？ それとも、ロボットとか」

このときはまだ知らなかった。そう遠くない未来。ウサミミな天才がそんなパワードスーツを作ってしまうということを。そして、美琴がある吸血鬼に頼まれてあるガイノイドを作ってしまうことを。

で、アリカ姫と……

「なんだ、コレが噂の「赤き翼」の秘密基地か！ どんなどころかとおもえば掘立小屋ではないか！」

ヘラス帝国第三皇女らしい。

「なあ、我が騎士よ」

アリカ姫がナギにそんなことを言っていた。

正直、言われるほうは恥ずかしいなあね。

「我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ」

「へっ、やれやれ相変わらずおつかねえ姫さんだぜ」

「いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

ナギがそう宣言した。

さあ、反撃開始だ。

「ちょっとしたおまけ」

ナギやラカンにはファンクラブがある。ほとんどが異性の会員だが。ちなみに、上条や御坂にも出来たのだが……男女比がほぼ1：1なのだ二人とも。

上条の場合、説教に共感して、憧れを抱く若者が中心のため男女比

が1：1になっている。もちろん、フラグを立てられたものも多いが。

御坂の場合は………男性ファンは言わなくても分かるが、女性ファンは……いわゆるお姉さま好きな人種がほとんどなのだ。これを知った御坂は

「ひ、ヒイイイイイ!？」

全身に悪寒が走ったという。

EP・4 とりあえず話し合ってみるのもいいと思う 戦いも近いし姫様も助は

もともと、原作ではやってない部分かなり多いので大分早く進むんですよねこれ。

ちょこつとオリ話やったらすぐラスボスとかやるだろうし。

そういえば、ここの御坂さんがマッドになっている気がする。

感のいい人は気がつくと思いますが、続編ではあの火星人は出てきません。これには、俺自身の時間移動の考え方とかあるので。

イレギュラーが起こった時点で彼女は過去にはこれないと思うんでイレギュラーが起こった未来の彼女はこれると思いますが。

一話が短いですが、こうでもしないとんでもない短さになりそうなんで。

あと、現在敵もかなり生存していたりします。主に色々作ってるヒロインのおかげで。

最後のおまけはノリです。

そして、説教に共感したものが多くことが重大な複線だったりする……かも。

EP・5 展開が早い？ ネタ話はほどほどに（前書き）

最終決戦までには6ヶ月かかったらしいですが、丸々カットされてるんで書きようが無い。

なので、続編に連なるネタ話をやります。
はつきりいつてかなりグダグダです。

今回は更に短くなるかな？

EP・5 展開が早い？ ネタ話はほんとに

く上条く

「ねえ、当麻」

「ん、どうかしたか美琴」

「召喚獣とか、召喚してみたくない？」

「は？」

「召喚獣よ召喚獣。こう、サモンって」

「いや、どこのゲームだよ」

「でも、出来そうでしょ」

「まあ、確かにな」

でも……中2の考え……あ、コイツ中2ぐらいだったな。

「魔法陣張って……サモン！」

シーン

「何も出てねえじゃねえか」

「おかしいなー？」

俺は知る由もなかったが、このとき、ある科学者が偶然召喚獣を科学の力などで召喚する方法を見つけていた。

そして、そう遠くない未来、召喚獣を使用した成績向上のシステムの試験校が出来ることになるとは微塵も思っていないのだった。

次の日

「ねえ当麻、貸しを溜め込む銀行とかあったら面白そうよね」

「は？」

「うっん、なんでもない」

実はそのシステムを持った学校はすでにあつたりするのだが、まだ二人は知らなかった。

次の日

「ねえ当麻、人助けが趣味のケーキ屋の店長とかいそうじゃない？」

「ああ、そうだなー」

「ちゃんと聞けー！！」ビリビリ

「だからって電撃打つなー！！！！！！」

まだ、このときはその人物は子供だったが、将来、美琴が言った通

りの人物とは夢にも思っていなかった。

次の日

「ねえ、当麻」

「今度はなんだよ」

「太陽オオオオオっていつてみて」

「やだよ！」

とあるヴァンパイアハンターの一族が実際にやってるらしいが。

次の日

「当麻、地球には未知の生物がまだたくさんいると思うの。魔法抜きでも」

「まあ、そうかもしれないな」

「深海にはきっと不思議な生物がいると思うわ」

20年後、その不思議な生物と遭遇することになるとは……このときは思っていなかった。ちよつと期待していたが。

次の日

「ねえ当麻」

「いつまで続くんだったこれ？」

「変身できる仮面ってありそうじゃない？」
「この世界にはあるんじゃないのか？」

俺が触ったら壊れそうだけど。

次の日

「結局、当麻の右手って……なんなの？」
「……さあ？」

あれ以来、竜王の顎もでてこないし。二度と出てこないかもないけど、最終決戦でてきたりして……あれ、これフラグ？

次の日

「私、執事って最強の生き物だと思うの」
「突然何を言っているんだ？」
「きつと、魔力も気も使わないでラカンに勝てるくらいよ」
「んなバカな」

その幻想を殺される日が来るとは微塵も考えていなかった。

次の日

「当麻」
「今度はなんだ？」
「えへへー大好きー」

「つて、酒飲んだらー！」

酒瓶が散らかっていた……さてはジャックか！？

「当麻ー」

「いいからくつつくなー！！ 理性がー！？」

次の日

「頭、痛い……」

「そりゃアレだけ飲めば二日酔いになるだろうな」

しかも絡みかたが美鈴さんソックリだったし。

次の日

「人助けをしている部活動とか無いのかな？」

「いきなり何の話だよ」

「あれよ、人助けを活動内容とした部活動」

「ありそうだけどな……漫画の中では」

いや、いつか見ることが出来るような気がする。

次の日

「毎日俺の味噌汁を作ってくれてあるじゃない」
「ああ、あるな」
「中国人だったら酢豚になるのかな？」
「しらねえよ」

次の日

「あれってあるじゃない」
「あれってなんだよ」
「あれよあれ」
「何も思いつかなかったのか？」
「……テヘッ」

次の日

「……なにも、思いつかない」
「無理して考えなくていいんだぞ」

そんなこんなで最終決戦の日は近い。

EP・5 展開が早い？ ネタ話はほどほどに（後書き）

実は、続編主人公の複線が出てたりする。

ああ、キャラ崩壊……なんだろうかこれは？

いくつクロスしたか分かる人はいるのだろうか？
自分でも数えていないけど。

次回、始まりの魔法使い戦。

ついに上条の本気が見られる。そして、御坂の真髄は能力の応用性の高さだ！ 戦闘から情報戦まで何でもござれ！！！！

EP・6 え、もう最終決戦！？ ラスボスの後は裏ボスがいるけどね（前書き

結構速く終わりそうなので、とつとと完結させます。

始まりの魔法使いとか上条さんと相性最悪ですね。

幻想殺しで触れただけで倒せそう。

いろいろ独自解釈とかあるけど最後までお付き合いください。

そして、シリアスをぶち殺す！！！！

あと、2話くらいで終わるなこれ。

EP・6 え、もう最終決戦！？ ラスボスの後は裏ボスがいるけどね

〈上条〉

アリカ姫達を助け出してから6ヶ月がたった。

そのあいだ、オレ達は「完全なる世界」と関係のある場所をとにかく潰していった。

人的被害だけが驚くほど少なかったが。

時々、前に戦った奴らを助けたりもしていて、そのたびに美琴の機嫌が悪くなったのだが……なぜでせうか？

あと、美琴がハッキングを仕掛けていたおかげでやりやすかったものもある。

そして、ラストダンジョン「墓守り人の宮殿」

「不気味なぐらい静かだな」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなものだ」

「あー、浮いてる城って……ベツレヘムの星を思い出すなあ」

「あれって城だっけ？」

いよいよ突入というところでナギがサインをねだられたりもしていた。緊張感が無いな……

そして、突入。

向こうは5人、こちらは7人。

「またあつたね千の呪文の男。これで何回目だい？ それに、初めて会う二人もいるね」

「アンタが例の……」

赤き翼をはめたという男がいた。

「さあ、ケリをつけよう」

アルが影使いの男を相手にし、ゼクトは水使い。ジャックは炎使い、詠春さんは電使い、ナギは先ほどの男、土使いと戦った。

そして、オレ達は、臨機応変に援護していた。具体的には美琴が電撃で遠距離からサポート。俺が右手で敵の攻撃を相殺していた。

そして、土の男以外を倒した。

「ナギはどうなった？」

「まだ、向こうにいるみたいだが……」
「勝ったみたいだな」

だが、

突然、ナギが誰かに打ち抜かれた。

「な、ナギ!？」

「いかん、『最大防御!』!」

ゼクトが障壁を張り、ラカンが受け止める体制に入る。

そして、俺は右手を突き出し、オレ達を襲ってきた光線を受け止める。

「うおおおおおおお……!……!……!」

ぐっ、消しきれない!?

「ぐあああああああああああああ！？！？！？！？」

俺の右腕が、消し飛んだ。

く
ラカン
く

「ぐ、みんな大丈夫か！？」

「ええ、何とか」

「ワシもじゃ」

どうやら、無事みてえだな。

「と、当麻！？」

何！？

「おまえ、右腕が……」

当麻の右腕が消し飛んでいた。

「いけません、早く治療しなければ……！？」

その場にいた全員驚いただろうな。なんせ、当麻の右腕が再生しはじめていたんだからな。

「ハア、ハア……」

「異能の力を消すことしか出来ないんじゃないかなかったのかその右手は？」

「俺にもよくわかんねえよ……よくよく考えたらこの右腕のことなんもしらねえんだよな」

「まったく、お前もかなり人間離れしてきたな」
「うるせえよ」

向こうでは、重症のナギをアルが治療していた。

「それより、ラスボスが出てきたぜ」

「みたいだな」

真っ黒なローブの男が俺達の前に立っていた。

見た瞬間、思った。俺にはアイツを倒せねえ。『俺には』

く上条く

「み、美琴……ココでまってる」

「で、でも!？」

「絶対帰ってくるから。返事もまだしてないしな」

「……当麻、絶対帰ってくるのよ」

「ああ、絶対だ」

「へへ、俺も行くぜ当麻」

「ああ、とつとと決着をつけようぜ」

「待ってください! たった二人では!」

「大丈夫だ、俺は無敵の千の呪文の男だぜ? 俺は勝つ!! 絶対だ!!!」

「それに、この世界を消そうなんて幻想は俺が絶対ぶち殺す!!」

「ラカン」

「ぐ、だめだアレには勝てねえ」

「ラカンはあれのマズさを肌で感じたようですね」

「ワシも援護に向かいたいところじゃが……」

「ですが……アレを倒すのは……いや、上条君が殴れば一発かもしれないですね」

「え、そんなにいいの？」

「ええ、むしろアレにとって彼の右手は天敵ですね」

シリアスなムードが台無しじゃねえか。

「上条」

俺とナギは「始まりの魔法使い」と戦っていた。

俺はすでに、感卦法を発動していた。

『ははははは……！　　我を倒すか人間よ！

それもよからう！　　我を倒し英雄となり羊どもの慰めとなるがよい
……！！

だが、ゆめ忘れるな　　全てを満たす解はない！

いずれ彼らにも絶望の帳が下る

貴様らも例外ではない』

「グダグダうるせえ!!!」

「たとえ世界が明日滅びようと諦めないのが人間ってものだろうが!!!」

『くつくつく、貴様らもいずれ私の語る永遠こそが全ての魂を救う次善解だと……』

「ふざけるな!!!」

『!?!』

「なんで自分の価値観でしか物事を見ない！ ココにはたくさんの人たちが生きている。たとえそれが作られた幻だとしても確かに生きているんだよ!! お前は这个世界で生きている人たちを自分の目で見たのか？ 触れたのか？ 少なくとも俺の右手じゃ壊せない幻想だったぜ！ いや、幻想ですらない。ここに生きている人たちは確かに現実なんだ!! それでもお前がまだ幻想だと言い張るなら、自分の方法でしか解決できないと思っっているなら……まずはその幻想をぶち殺す!!!」

そして、俺の右腕から「竜王の顎」が飛び出た。

「グオオオオオ!!!」

「な、なんだその力は！？　まるで神すら消し去ってしまおう
な……！？」

「行くぞ、ナギ!!」

「おう!!!!」

[illegible]

そして、「始まりの魔法使い」は消え去った。

「ハアハア、
 まだだ、
 姫子ちゃんを助け出すぞ！」

「オウ!!!」

宮殿内では魔法世界の魔力消去の魔法が完成しており、オレ達は急いで中心へ向かった。

「ナギ!!!」

「当麻!」

「無事か!?!」

途中、みんなが合流した。

「いそいで脱出しないと」

「まだだ、姫子ちゃんがまだいる!!!」

「でも、どうやって止めるんだ!?!」

「魔法は使えな……まさか!?!」

「ああ、俺の右手は異能の力を打ち消す。そう、魔法無効化能力っていう異能もな」

「たしかにそれならまだ可能性はありますね」

「よし、行くぞ!!!」

そとではアリカ姫たちが艦隊を引き連れて食い止めてくれているらしい。どのくらい時間が残っているか分からないがとにかくいそがないと!

「いた、あそこだ！！」

「行くぞ！！」

アスナ姫を救出するため、足場を飛び移りながら走っていく。

「くっ、後一步で！？　って、うわ！？」

「飛んでけッ！」

ジャックが、俺の襟を掴み投げた。

「ぐっ、おおおのおのおのおのおのおのおのおのおのおのお……！」

アスナ姫だって普通に暮らせたはずだ。始まりの魔法使いだって魔法世界の人たちを助ける方法を見つけたらその方法を選んだはずだ。魔法世界の人たちだって生きているんだ！！！！

神様、アンタがこんな悲劇的な結末をよういしたってなら……まずはその幻想をぶち殺す……！！

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお

お!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そして、右腕から大量の力が流れ出し、この世界に流れ始めた。

「オオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ぐ……どうなったんだ？」

「当麻!!」

「み、美琴……………」

「おや、気がつきましたか」

「アル。成功したのか？」

「ええ、成功どころか大成功。予想以上に良い結果になりましたね」

「予想以上？」

「おそらく、『幻想殺し』とは君の中に眠っていた莫大な力を封じ
るための物なのでしょう。もっとも、今となつてはもう分かりませ
んけどね」

「???? どういうことだ？」

「まあ、その莫大な力が君の中からこの世界に流れ込んでしまい、
この世界を完全に現実の世界として確立してしまつたんですよ」

「は？」

「ですから、魔法世界の住人は二度と消える心配はありませんね。
君の中にあつた力がなんだつたのかは不明ですが、世界を一つ支え

「それが出来るほどの力であったのは間違いないようですね」

「つて、ええええええええええ！？」

「あ、そうそう。君の中の力が消えたので幸運を打ち消すのも無くなったのではないですか？　右手の力自体が無いのか任意に発動できるのかは分かりませんが」

「美琴、弱く電撃打ってみてくれないか？」

「うん」

パ
キ
ュ
ー
ン

「なんか、こう……集中しないとだめな感じが」

「音もいつもより弱いですね」

「でも、もう必要ないのかもな」

「それに、不幸じゃなくなるのですからね」

「それはマジでうれしい……」

「さて、そろそろ私は行きますね。ナギたちも面白そうなことになってますし。それに、積もる話もあるようですし」

「……当麻、無事でよかった」

「言っただろ。必ず帰ってくるって」

「でも、でも……」

「あ、そうだ美琴……」

「なに、とう……ん」

「……って、いきなり何するのよアンタは!! / / / / /」

「いや、返事」

「え / / / / /」

「あのとき、追っかけてきてくれてうれしかったし、一人じゃ心細かっただろうしな。それに、なんだかんだでお前と一緒にいたいなとおもってたな……その、俺も好きだ、美琴」

「ふ、ふにゃああああ」

「ちょ、電撃出すなああああ!!!!!!」

翌日

「どうしたんだよ、ナギ」

「お前らに頼みがあつてな」

ナギの後ろからは、10歳くらいの女の子が出てきた。

「もしかして、そのこがアスナ姫？」

「ああ、この子をかくまうて欲しい」

そして、2ヵ月後

アリカ姫は父親殺しなどの罪を着せられてメガロメセンブリアに逮捕されてしまった。

まるで戦争の原因だとも言つように。

まだ、ハッピーエンドには届かない。
最後の1ピースはまだ揃っていない。

EP・6 え、もう最終決戦！？ ラスボスの後は裏ボスがいるけどね（後書き

とりあえず、ここで終わるよ。

今回は上条さんのおかげ＆今まで相殺した幸運が帰ってくるかのよう
な奇跡が起きました。

ただ、「竜王の顎」や右腕の再生が出来なくなりました。

上琴も出来たし、後はどうやってラストを書くか……そして、続編
はどのシーンから始めるか。

次回は御坂の本気が見られるよ。

EP・7 拍手喝采！ 大喝采！！ 電撃姫は暗躍する いい意味で そして、

さあ、始まるよ。

最高の宴が！！！！

今回は美琴のターンだ！！！！

美琴の見た目は番外固体のクマ無し版をイメージしてください。

あと、ゼクトが生存してますがツッコミ無用で。

EP・7 拍手喝采！ 大喝采！！ 電撃姫は暗躍する いい意味で そして、

～三人称～

元オステイア女王、アリカが逮捕された日より、2年の時が流れた。

魔法世界に流れた力は安定しており、崩壊の危険性は無くなった。

そして、2年の間に、上条たちは一度地球に行き、アスナ姫を見つからない場所に預け、魔法世界に戻ってきていた。

そして、紛争地域を回りながらある活動をしていた。

「やっぱり……メガロの奴らの仕業みたいね……………」

「美琴さん、それでアリカ姫は？」

現在、美琴はクルトと行動していた。

「……………10日後に処刑だそうよ」

「！？ なら早く助けないと！！」

「……………そうしたいんだけど……………一旦、集合しましょう」

～上条～

俺、美琴、ジャック、詠春さん、アル、ガトウさん、ゼクト、タカミチ、クルトは「赤き翼」の隠れ家に来ていた。

ナギは、これから話し合うことを考えればいいほうがいいだろう。

「ナギはアリカ姫が言ったとおり、『女一人救ってる暇があるなら世界を救え』と言って紛争地域を回っているようですね」

あるがそう言う。

「まったく、似たもの同士だな」

「そうじゃのう、いい加減素直になればよいのにの」

「で、どうします？ ナギはああ言ってますが、処刑当日には必ずアリカ姫を助け出しに行きますよ」

「え、そうなんですか！？」

クルト……気がついていなかったのか？

「クルト以外は全員気がついていましたよ」

「え！？ ってことは当麻さんも！？」

「当たり前だろうが……」

「ウソだ！？ 鈍感な上条さんでもきがついたなんてウソだ！？！
！？」

クルトが壊れたな……… っていうかそれは上条さんに対して失礼ですよ。

「で、美琴ちゃんのほうはどうなった？」

「ふっふっふ、準備はバッチリよ。あとは最高のタイミングで魔法世界中にこの情報を一斉に流すだけでメガロはつぶれるわ」

「……超能力とはそこまでできるものなのか？」

「最初は戸惑ったけど、魔力を混ぜることでまほネットも簡単に掌握できたわ。ていうか技術レベルが私達のいた世界よりもかなり遅れているからものすごくやりやすかったのよ。あんなセキュリティ紙切れみたいなもんよ」

なんか、美琴もチートじみてきたなあ……ちょっと悲しくなってきた。

「うーん、でもこれじゃあアリカ姫は女王に返り咲くだけね……それじゃあ、本当の意味ではすくわれたことにはならない」

「メガロがつぶれた後の後任組織も欲しいですね。なるべく、頭の固い連中がいらないほうが」

お、それなら

「それなら心配いらねえぞ。今まで戦ってきた奴らがなぜだかしらねえが協力したいって言うてきてるんだ。今は悪いこともなんもしてねえみたいだし」

「いえ、間違いなくあなたの影響でしょうねその人たちは」

「は？」

「まあ、それなら大丈夫でしょうね。幾人か代表者を呼んで細かいことを決めましょうか……となると……アリカ姫をどうするかですね」

「あ、いい事思いついたかも」

あれ、美琴さん？ ナンデスカその笑顔は……まるで面白い物を見つけた美鈴さんのような……………

「えつとね——————というわけなんだけど」

「ウホホホホ！！！！ そいつは傑作だなあオイ！」

「ソレでいきましょうか。もちろん、ナギには内緒で」

「たまには弟子にプレゼントでもおくってやろうかのう……………プツ」

「いや、そんなノリで対処していい問題じゃないですよ！？」

「クルト！ 恋する乙女のためなら何をやってもゆるされるのよ！
！」

「美琴さん！？ でも限度を超えてますよ！？」

「まあまあおちついてクルト」

「そうだぞ、こんなおもしろ……………すばらしい方法は他にはないぞ」

「ガトウさん！？」

「師匠！？」

「案外、あっさりと解決しそうだな」

そして、10日後。

アリカ姫が、処刑のため谷底に落ちて行った。
周りにはメガロのへ兵士や高官がいたが……正直これから起こることを考えると同情するな。

現在、メガロの中にいる俺達の仲間がこれからやることの準備中だ。

アリカ姫が落ちて行ったが……下ではナギがいて、助け出しているはずだ。

公開処刑のため、カメラが回っているが……メガロ側のカメラはここで止まる予定だ。

ナギにはココまで言っている。

そして、メガロ側のカメラは止まっているが、美琴が用意したカメラはまだ動いていたりする。

「ジャック・ラカン?!?!?」

「青山……詠春!?!」

「アルビレオ・イマ!!」

「ガトウ!」

「上条当麻に……御坂美琴!!!!」

メガロが油断したところでオレ達が姿を現す。

「おのれ、反逆者め!!!」

「ふふふー、どっちが反逆者なのかしらね？」

「なに……!？」

どうやら、向こう側に通信が入ったみたいだな……たぶん、メガロのやっていた黒いことが全部バレたんだろうな……世界中に。

美琴が前々から準備していたことの一つで、すでにボタン一つで斉送信できるようになっていた。

押したのはたぶんクルトだろうな。ちょっと引いていたけど。

「さて、これで私達にはアリカ姫を助ける大義名分も、あんたら悪党を潰す口実もできたわ……メガロはもうおしまいよ諦めなさい」
「だが、私達がいなくなれば住民達はどうなる？　メガロが無くなれば……」

「ソレは大丈夫よ。私達が何の準備もしていないだなんて思ってないわよね。ちゃんと後を任せられる人たちを用意したに決まってるじゃないの……それに、この私に情報戦で勝てるわけ無いでしょ。あんた方には絶対に情報が入らないようにしておいたから全く気がつかなかったでしょうけど」

ほんとに情報戦チートになってるな……

「く……ええい、ひっ捕らえろ!!!」

古ッ!？

「まったく、その程度の戦力でオレ達に勝てると思うなよ」

「それに、私達がこの様子を全世界中継していますしね」

「どっちみちあんたらは終わりだよ」

「さて、一暴れしますかな」

「知ってる？ 人の恋路を邪魔する奴は……馬に蹴られて死ぬって」

美琴が言いたいののはたぶん、ナギとアリカの邪魔すんなんてことな
んだろうな……だったらこの後することもやめるよ。あの二人には
酷だぞ。

「大丈夫、20年もたてばいい思い出になるわ」

「心よむなよ」

んで、オレ達は暴れまくった。もう、暴れに暴れまくった。

「ふー、殲滅完了ね」

「これで、死亡者ゼロは恐ろしいな」

「非殺傷って結構凄い発明だと思わない？」

「結構えぐいけどな」

「むー、ならもつと凄いもの作ってやるわよ。人的被害だけじゃな
くて、周りのものも破壊しないような結界とか」

「さいですか……ところでアレ、本当にやるのか？」

「やるわよ……ていうか、やってるわよ」

「マジですか」

「はっはっは、これで1年は弄れるな」

「ふっ、そうだな」

「詠春さんまで……」

「あの馬鹿にもたまにはいい薬になるじゃろ」

オレ達がやろうとしていること、それは……

ナギのアリカへのプロポーズ全世界中継。

どんな拷問だよ……

「ほら、始まったわよ」

「これで、アリカ姫を女王に戻そうとする人もいなくなりますね」

「もう、救われてもいいはずだしな」

「そのために用意した新政府だしね」

「そうですね」

この全世界中継にも色々目的がある。

まず、アリカ姫の名誉回復

次にメガ口の不正を暴き、新政府を立てやすくするため。

三つ目はアリカ姫を女王に戻さないため。アリカ姫は自分から戻ろうとするだろうが、この世界中継で、それを周りが許さなくなるだろう。もう、十分働いたことだしな。

最後に、美琴、ジャック、アルの三人曰く『面白いから』……むしろソレが本音だろ!!!

『俺がアンタを好きだからに決まってるおが!!!!!!』

ああ、始まったぞ……別の意味での公開処刑が。

『好きな女の一人も救えねえ男に世界が救えるわけねえだろ、バカ』

うわー恥ずかしいセリフってんな

「当麻が言えたことじゃないわよ」

うるせえよ。

『で、アンタはどうなんだよ』

『な、何がじゃ?』

『アンタは俺のことどう思ってるんだよ?』

『なぜ童が言わねばならぬ!?』

『俺が言っただからフツー言うだろ?』

『そ、そうなのか? し、しかし童は王族であるが故元々プライベートルトは許されぬ。それにいまや大罪人「災厄の女王」であるぞ、苦界に満ちた民達のためにもそのような……きゅ!?!?』

ナギがアリカ姫に頭突きしたな。

『何をするのじゃ!?!』

『アンタ今自分で王族じゃねえっていったじゃねえか』

『う』

『それに、「災厄の女王」も今さつき死んだ。アンタを縛る鎖は何一つない』

ちなみに、テロップで「この二人は全世界中継されていることを知らねーぜ b y ラカン」って出てるぞ。
さっそく弄ってるのか……

『今のアンタは何者でもないただのアリカ。ただ一人の人間だ』

『一人の人間……』

『そ、そーゆーアリカさんとしてはどう思ってるのかって聞いてんだ』

『な、う……嫌いではない／／／』

『んあん？ 声小さいス』

『よし、花火準備だ！！』

『はい！』

『いそげ、プロポーズは近いぞ！！！』

本当になにやってんだこの人たち。

『ああそうじゃ！ この二年間一日たりとも主のことを考えなかった日はなかったわ！！！ ソレがどうした悪いか！？／／／／／／／／／／』

『いや、悪かねえ』

「キスシーンキター……!!……!!」

「ははは、ナギもやりますねえ」

「花火打ち上げるか？」

「いやいや、もうすこし待て、まだだ」

「くつくつく、そうだ最後の最後でやってやるっぜ」

生き生きしてんなあ……

『アリカ……結婚すつか』

……アンタの罪も後悔も、まだ残ってる民への責任って奴も全部背負ってやるぜ……なっ』

『む……はいっ』

「いまだ、花火を打ち上げろ……!!」

「点火しろタカミチ！」

「はい……!!」

ヒュー……ドンッ……!!

『……!!?』

ビックリするだろうなー、花火には結婚おめでとぅって書いてあるからな……まだ結婚してねえだろ。

『な、な、なんじゃこれは！？』

『さては……あいつ等の仕業かあああああ！……！？！？』

とりあえず、責任を感じてるならちゃんと幸せになれとアリカ姫は周りに言われたとだけ言っておこう。

「そういえば、美琴さんプロポーズ先こされてしまいましたね」

「え？ ああー言ってなかったわね。私も当麻も結婚できる年齢になったから籍は入れてあるわよ」

「……は？」「……」

「いや、プロポーズもされていたし……アリカ姫のことが片付いてから式も挙げるつもりだったし」

「……はあああああああ！……！？！？！？」「……」

いや、全部片付いてからにしようとおもったんだけどな。待たせすぎるのも悪い気がする。

くエピソードく

オレ達が魔法世界に来てから10年ほどの月日が流れた。
結局、元の世界に帰ることは出来そうもない。思えば、インデックスはなんとなく分かっていたんだろうな。
だから、あそこで言いたいことを全部言っただと思う。

あの後も色々あった。

アスナ姫はガトウさんが預かることになり、麻帆良学園で暮らすことになった。
成長が止まっているので、学校にちゃんと通えるようになるまで時間がかかりそうだったが。

結婚式は日本で挙げた。

魔法世界人も地球にこれるようになったので、ジャックたちも居る。

ナギやアリカはイギリスで行った。

詠春さんに誘われて行った京都ではリョウメンスクナノカミと戦ったりもした。

いや、フルボッコって言ったほうがいいな、うん。

赤き翼のメンバーが全員居たからな。地形が変わらなかつたのが不思議だった、美琴がなにかまた作つたんだろうな。

確かに、色々壊したはずなのに、何もなかったかのような光景だったからな。

俺は、麻帆良で教師をすることになった。

ガトウさん、タカミチも一緒だ。

詠春さんは京都に戻るらしい。

ジャックは……まあ、元気にやってるだろ。そういえば、ヘラスの第三皇女に懷かれていたな。

クルトは新しく発足した政府、管理局だったかな？とにかく新政府で活動するらしい。

ゼクトは、魔法世界で暮らしているが、よく考えれば何者だったんだ？ ジャックと違って音信不通ではないが。

ナギとアリカはイギリスで静かに暮らしている。たまに紛争地帯などを回ったりしているらしいが。

美琴は俺と一緒に麻帆良に住んでいる。

そして、麻帆良では吸血鬼、エヴァンジェリンとも出合った。

ナギが登校地獄という呪いをかけたらしい。

見た目は子供だが600歳を超えているそうだ。

ナギは3年で呪いを解くとか言っていたが……忘れそうだな。

その次の年、俺と美琴の間に子供が生まれた。
女の子で麻琴と名づけた。

聞くところによると、ナギのところでも生まれらしい。

男の子で、ネギという。

なぜ、その名前にしたんだナギ。

関西呪術教会とのいざこざを止めるのを手伝ったこともあったが、アレは本当に大変だった。

まだ、一部頭の固い連中もいるが、最近の東西の中はおおむね良好だろう。

最近では麻帆良も大きくなってきた。

当初の数倍の大きさになってしまい、全貌を知る者はいないのではないかと思うくらいに。

小さい県並みの大きさはあるかもしれない。

そのせいで、まほら祭の規模がとんでもないことになってしまった。

そして、今、麻琴も5歳になった。

「はー、まー」

今までの不幸からは考えられないくらいに幸せである。

これからも色々なことがあるだろうが、俺達の物語は一旦ココまでだ。

次からは、この子達の物語だ。

EP・7 拍手喝采！ 大喝采！！ 電撃姫は暗躍する いい意味で そして、

ふうー終わった。

続編はどこからやろうかな。

リリなの、はクロスする予定なんだけど、A、Sが終わった辺りからにするか、最初からやるか。

いや、シリアスにはしたくないからそこらへんは簡単な回想だけで終わらせたいんですよ。

それが、シリアスなんかクソくらえの方向で行くか。

続編で考えている麻帆良はなかなかカオスなことになっているぞ。あと、同じ原作キャラでも、年齢差が原作とは異なる場合もある。

作者の趣味前回だ。そして、全部ネギまベースで設定変更だから。

同じ原作内のキャラが全員出るとは限らない。

主人公の出生話から始める予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9181x/>

とある赤き翼の奮闘記録

2011年10月29日17時13分発行